

## ペシュメルガは「国軍」になり得るか ——イラクのクルド人兵士の歴史と今——



(一財) 日本エネルギー経済研究所 中東研究センター 主任研究員 吉岡 明子

「イスラーム国」との戦闘が続くイラクで、しばしばイラク軍と並んで言及される組織にペシュメルガ (peshmerge)<sup>(1)</sup>がある。イラク北部のクルド人の自治区、イラク・クルディスタンのクルド兵のことだ。クルド問題への関心の高まりと共に、ペシュメルガの名前を日本のメディアでも目にする機会が増えた。だが、彼らが何者で、どのような組織なのかという、その内実はあまり知られていない。

長らくイラクの反政府ゲリラだったペシュメルガは、1990年代以降、クルドがイラクの中に自治区を築くようになると、自治区の軍隊として位置づけられるようになった。2003年のイラク戦争後には、新たなイラク憲法のもとで、自治区が「地域行政に必要な警察、治安機関、地域防衛隊」などの治安部隊を持つことが正式に許可されるようになる。建前としては当然ながら、こうした自治区の治安部隊はあくまでイラクの国防システムの一部に位置づけられる。しかし、現実には、イラク政府はペシュメルガへの指揮権を持っておらず、また、逆にイラク軍や連邦警察は自治政府の許可なく自治区に入ることもできない。なぜなら、イラク軍自体がペシュメルガにとっての仮想敵だからだ。今では、自治区は事実上の国家のような状況になっている。

しかしながら、仮にクルディスタンが独立国家になったら、果たしてペシュメルガは本当に国軍として機能し得るのかということ、極めて懐疑的にならざるを得ない。形式上は、自治政府であるクルディスタン地域政府 (Kurdistan Regional Government/h'ikumetî herémî kurdistan) がペシュメルガ省 (国防省に相当) を通じて、ペシュメルガを統括していることになっている。だが現実には、1980年代までイラク政府に対する武力闘争を率いていた二大政党が、未だにそれぞれの配下に大勢の兵士を抱えており、統合の必要性が再三指摘されながらも、実現には至っていない。本稿では、20世紀半ばからのペシュメルガの歴史と、過去四半世紀の間のクルドの国造りの試みを振り返り、現在のペシュメルガが抱える課題を分析したい。

(1) 原則として、イラク・クルディスタンの固有名詞はクルド語ソラニ方言を統一クルド語アルファベット (<http://yekgirtu.com/>) にしたがってローマ字転写し、シリアやトルコのクルマンジ方言はラテン・クルド語表記を使った。

## 1. 反政府武装ゲリラ組織としてのペシュメルガ

自治や独立を求めるクルドの反乱兵が、「死に向かう者」を意味するペシュメルガと命名された時期には諸説ある。一つは1946年にイ

ランのマハーバードで樹立され、1年と持たずに崩壊したクルディスタン共和国（通称マハーバード共和国）の軍隊がペシュメルガと名付けられたという説であり、あるいは1960年代始め、イラクにおけるクルドの反乱が本格化した時期に彼らがペシュメルガと命名されたという説である [Chapman 2011: 39-40]。クルディスタン共和国の軍隊の主たる構成員はイラクのクルド兵だったということもあり、今でもペシュメルガという名称は主にイラクのクルド兵に対して使われる傾向がある<sup>(2)</sup>。

クルドの反乱は、オスマン帝国末期から繰り返されてきたものの、それは民族主義的な動機と同時に、部族的な反乱と位置づけられるものでもあった。1946年にKDP（クルディスタン民主党, Kurdistan Democratic Party/partî dîmokratî kurdistan）が形成され、1960年代から反政府武装闘争が本格化するなど、イラクでは20世紀半ば頃から民族主義を背景にしたクルドの運動が形成され始めていく。しかし、極めて部族的な性格の強いクルド社会において、部族長の意思決定は重要な要因であった。民族主義的感情が広く共有されるようになっていた1970年代半ばにおいても、部族長がどういう立場をとるかによって、その部族が反政府運動に参加するのか、中立の立場をとるのか、反対するのかが決まったという [Bruinessen 1992: 7]。

クルドの知識人は1930年代から複数の政党を形成し始め、それらは後にKDPに合流したが、KDPの幹部は党首ムスタファ・バルザーニ（mistefa barzanî）をはじめ、有力部族長らが占めた。こうして、KDP内部には、知識人を中心とする脱部族主義的な民族主義に基づいたクルドのエンティティの確立を目指す動きと、あくまで部族的な要素を内包したままナショナリズムを追求しようとする二つの相反する潮流が同居することになった。前者の代表がイブラーヒム・アフマド（îbrahîm eh'med）、後者のそれがムスタファ・バルザーニであった。

---

### 筆者紹介

1999年大阪外国語大学外国語学部卒。日本エネルギー経済研究所・中東研究センター研究員を経て2013年より現職。2007年にガルフ・リサーチ・センター客員研究員。専門はイラクの現代政治・経済並びにイラクにおけるクルド問題。

---

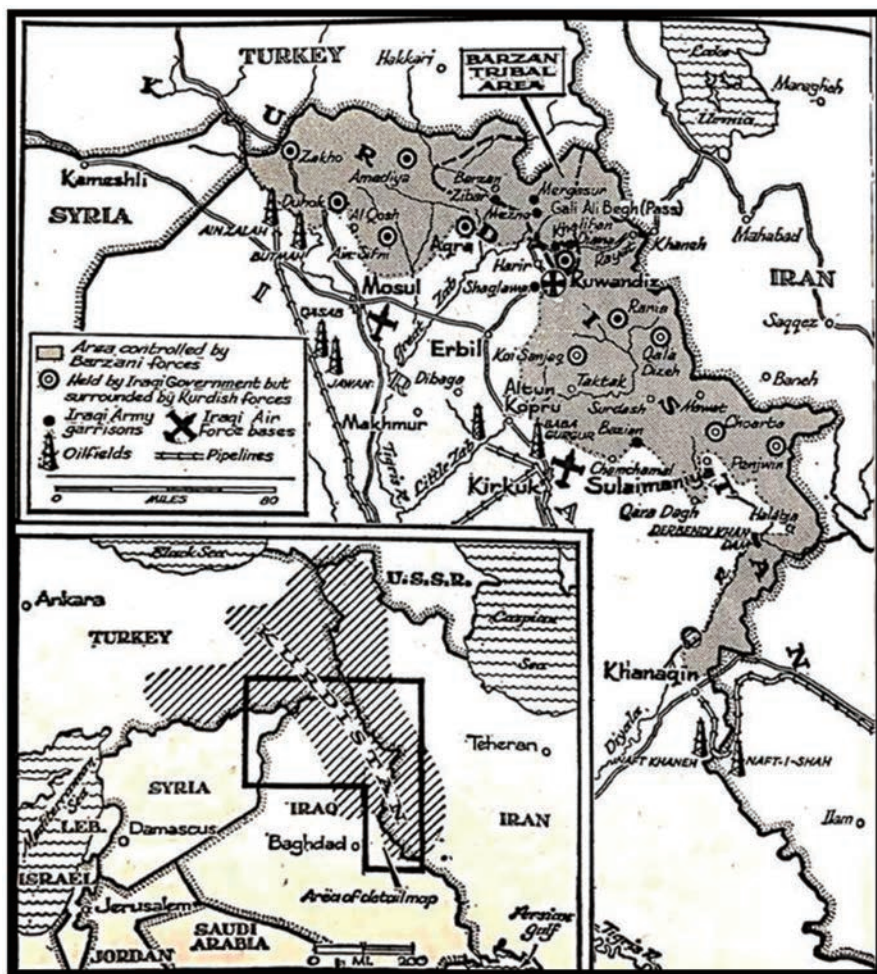
---

(2) 他方、トルコのPKK（クルディスタン労働者党, partiya karkerên kurdistan）の兵士は、戦闘員としての訓練だけではなく、クルド民族の歴史や革命思想教育を受けたプロフェッショナルであるという自負のもと、自らをゲリラと位置づけ、ペシュメルガとは名乗らない [勝又 2001: 47]。



イラク首相との交渉に向かうムスタファ・バルザーニ（1963年）

出所：Susan Meiselas with chapter commentaries by Martin van Bruinessen, *Kurdistan: In the Shadow of History*, Random House, 1997.



クルドの武装蜂起を報じるニューヨーク・タイムズの記事（1962年9月10日版）

出所：Susan Meiselas with chapter commentaries by Martin van Bruinessen, *Kurdistan: In the Shadow of History*, Random House, 1997.

イランにおけるクルディスタン共和国の崩壊に伴ってムスタファ・バルザーニがソ連に亡命した後、1953年にはイブラーヒーム・アフマドがKDPの事実上のトップとなって左派的な政策を推進したが、それでも、イラク軍と対峙するために十分な兵力を動員できる力を持っていたのは部族長らであった [Tahiri 2007: 105-108]。バルザーニは、1958年のイラク共和制革命に伴う恩赦でソ連から帰国し、1961年にイラク北部で反政府武装活動を開始する。しかし、武装闘争の開始に伴い、イブラーヒーム・アフマドらKDP政治局のメンバーがバグダードからクルディスタンに引き上げてきた際、バルザーニは自らの地位が脅かされることを嫌って、彼らを合流させなかったという。イブラーヒーム・アフマドらはスレイマニヤ (silémaní) 県北部のマワト (mawet) に拠点を構え、別にペシュメルガを組織して反政府武装活動を実施することになった。これが、1975年にPUK (クルディスタン愛国同盟, Patriotic Union of Kurdistan/yekétí níshtimaní kurdistan) として独立した政党を立ち上げることになる当時のKDP政治局のメンバーと、ムスタファ・バルザーニが率いた現在のKDPとの、最初の亀裂の顕在化であった [Tahiri 2007: 118-119]。今に至るまで、PUKは南東部スレイマニヤを拠点とし、KDPは北西部エルビル (hewlér) とドホーク (dihok) を支持基盤としているという構図は変わっていない。

イラク政府との交渉方針を巡る対立からイブラーヒーム・アフマドが政治局を追われた1964年頃、彼やその義理の息子ジャラル・タラバーニが掌握していたペシュメルガは1,000~2,000名程度、他方でムスタファ・バルザーニのそれは1.5万~2万程度だったという [Tahiri 2007: 121-122]。党内の亀裂が深まる中、1960年代後半には、劣勢を補



KDP 指導部。中央がイブラーヒーム・アフマド、右端がジャラル・タラバーニ (1964年)

出所：Susan Meiselas with chapter commentaries by Martin van Bruinessen, *Kurdistan: In the Shadow of History*, Random House, 1997.

うためにジャラル・タラバーニらはイラク政府と手を組んでしばしばバルザーニらと戦った<sup>(3)</sup>。1975年にPUKが正式にKDPから分裂して党勢を拡大して行く過程で、両党はクルドの民族闘争に従事すると同時に、平行してそれぞれがイラク政府やイラン政府の支援を得て政党間の権力闘争を繰り広げるといった状況が続いた [Tahiri 2007 : 161-162]。

イラク軍から離反してペシュメルガに参加する元イラク軍兵士らが、部族兵を中心とする統率のとれていない部隊の組織化を支援し<sup>(4)</sup>、1963年には、トルコ国境に近いザホ(zaxo)に初の士官学校が開校された。1970年代半ばにはカーキ色の軍服が普及するようになり、移動式の医療設備も用意され始めた。しかし、階級制度は整備されておらず、あくまで各々が土地勘のあるエリアを中心に展開することが多かった模様である。イラク軍から奪ったラジオで通信を傍受する一方、指令はすべてクーリエによる手渡しで、ペシュメルガの移動も徒歩やロバが一般的という状況であった [Chapman 2011 : 77, 80]。

1975年、イラク政府とイラン政府の間でアルジェ合意が結ばれたことを受けて、イランは対クルド支援を停止した。同時に米国もクルドへの支援を止め、イラクにおけるクルドの武装闘争は壊滅的な打撃を受けた。この時期にペシュメルガの数も大きく減ったとみられる。1975年にPUKを立ち上げたジャラル・タラバーニは、1977年からペシュメルガの組織化に乗り出し、KDP時代のペシュメルガ組織の名称を変更し、複数の組織が持っていたペシュメルガを党の下で統合された軍事組織とすることを目指した。1980年後半時点で、PUKのペシュメルガはおよそ1万人規模、KDPの正規ペシュメルガは1~1.5万人、非正規兵（地元指導者が率いる地域限定の兵力）が2~3万人規模であったと見られる [Chapman 2011 : 89-90]。

## 2. 自治区形成後のペシュメルガ

湾岸戦争後の1991年秋、米国との戦争や国内の民衆蜂起、国連経済制裁などによって疲弊したフセイン政権は、クルド人集住地域である北部から軍を撤退させ、経済的に封鎖した。これにより、この時のイラク軍撤退ライン（通称グリーン・ライン）以北が、イラク・クルディスタンとしての事実上の自治区となり、クルド政党は選挙を行ってクルディスタン地域政府という自治政府を形成するようになった<sup>(5)</sup>。この地区は2003年以降、イラク憲法においてクルディスタン地域 (the Region of Kurdistan/heremí kurdistan) という公

---

(3) 当時、2,000~4,000名程度のPUKのペシュメルガに「給料」を支払っていたのはイラク政府であった [Bengio 2012 : 35]。

(4) 組織だった訓練を受ける機会が乏しかったペシュメルガにとって、1990年代まで断続的に、イラク軍からの離反兵士が組織化や訓練の役割を担った。

(5) イラク政府は1974年に、クルド勢力との政治交渉が破綻したことを受けて一方的に自治法を制定し、イラク政府がコントロールする「自治政府」が形成されてきた。しかし、この時代の自治政府は現在の自治政府（クルディスタン地域政府）の前身組織ではないため、ここでは扱わない。

式な自治区として認知されるようになっている<sup>(6)</sup>。

イラク軍の撤退によって、1980年代まで山間部を拠点にゲリラ戦に従事してきたペシュメルガの組織や役割も変化する。すなわち、党や個人が支配する民兵組織から、1992年の選挙によって発足した自治政府のもとで、一元的に組織化された公式な軍隊へ再構成されることが目指された。自治区の法律第2号「クルド解放運動の指導者選出の規則を定める法」(1992年)では、クルディスタン解放運動の指導者がイラク・クルディスタンのすべての軍事力を統括する最高司令官になると定めており、政党が民兵や武装組織を保持することは禁止された [Chapman 2011: 98]。

この時期に特徴的なこととして、それまでほぼボランティアで、村人の支援に支えられ活動していたペシュメルガが、定期的に給与を得る公務員に近い形に変化したことである。1980年代の弾圧でイラク政府によって強制移住させられた大勢のクルド人は、農業や牧畜という生活の糧を失って、代わりにペシュメルガと戦うためにイラク政府に雇用されていた。しかし、イラク軍の撤退後にはそうした職がなくなり、イラクに対する国連の経済制裁、およびイラク政府によるクルディスタン地域への経済封鎖という二重経済制裁下であって、彼らの多くが数少ない雇用機会の一つとしてペシュメルガに参加することを選んだ<sup>(7)</sup>。特定の党の影響力が強い地域では、その党への忠誠心が経済的な恩恵をもたらしたという事情もあった。結果的にペシュメルガの人数は再び増え、2003年にイラク戦争が行われた際には6万人規模になっていた [Tahiri 2007: 268-269; Lawrence 2008: 5]<sup>(8)</sup>。

だが、期待されたペシュメルガの統合は、現実にはほとんど進まなかった [Stansfield 2003: 149]。1992年に行われた自治区の議会選挙と大統領選挙では、KDPとPUKが選挙結果を二分して勝敗がつかなかったため、両党が公平に権力を分け合う形で連立政権を形成したものの、1994年には関税徴収や土地争いなどを発端に内戦に陥った。2,000名に及ぶ死者を出した末に1998年に停戦した後も、自治区はエルビルを拠点とするKDPの支配地域と、スレイマニヤを拠点とするPUKの支配地域に分割され、ペシュメルガはそれぞれの党が支配するという状況が続いた。

---

(6) ただし、多くのクルド人がクルディスタンの一部だと主張するキルクーク県やエルビル県南部などの地区は含まれていない [Yoshioka 2015: 22-24]。

(7) ペシュメルガに対峙させるためにイラク政府が雇ったクルド兵はジャシュ (jash) と呼ばれた。1980年代のイラン・イラク戦争時には、イラク軍における兵役免除や、経済的利点を理由にジャシュになるものも多かったが、彼らの一部はペシュメルガを密かに支援する者もいたという [McDowall 1996: 28; McDowall 2007: 336]。したがって、ジャシュからペシュメルガに転じることはそれほど奇異なことではない。

(8) 同時に、ペシュメルガ省のもとで官僚化も進み、記章や制服の統一、旅団を中心とした組織編成、イラク軍に準じた階級制度なども導入されたという [Chapman 2011: 96-97]。しかしながら、両党のペシュメルガ統一が進まなかった結果、こうした組織改革も徹底されなかったと推察される。

### 3. イラク戦争後のペシュメルガ

2003年のイラク戦争によるフセイン政権の崩壊は、イラクの政治情勢に大きな変化をもたらした。それまで築いてきた事実上の自治区の地位をイラク国家の中で正式に位置づけるべく、クルドは積極的にイラクの国家建設に関与していくことになる。ここでは、ペシュメルガをイラクの国防システムの中にどう位置づけるかという問題に対する取り組みと同時に、クルドの民族的利益を守るために、内戦によって二分された自治区の再統合、すなわちペシュメルガの統合が再び課題として浮上した。

2005年に行われたイラク国会選挙と同時に、1992年以来2回目となるクルディスタン議会選挙も実施された。この選挙ではKDPとPUKが候補者リストを一本化して圧倒的な議席を確保し、両党が権力を分け合う形で2006年に新たな自治政府の発足に至った<sup>(9)</sup>。ペシュメルガ省は、財務省や司法省などと並んで統合が先送りされていたが、2009年には統合が完了した。その結果、ペシュメルガ省のもとに、旅団規模の地域防衛隊が15形成されており<sup>(10)</sup>、現在この地域防衛隊に5.1万人が所属している [Knights 2015 : 27]。

同時に、それ以上の兵力が今も党の直接的な支配下に置かれている。KDP政治局のもとに、通称、第80ユニットと呼ばれるペシュメルガが存在し、その規模は2.5万人を数える。そのうち2万人は10の地域旅団に所属し、他に自治政府大統領の警護を専門とするグラン部隊、バルザーン部族から構成され、シルワーン・バルザーニ (sírwan barzaní, マスウード・バルザーニ自治政府大統領の従兄弟) が率いるバルザーン部隊がある。さらに、この第80ユニットと並んで、ゼラバニ (zérevaní) と呼ばれる2.5万人規模の重武装民兵部隊が存在する。空港や油田地帯など、重要設備の警護を主要任務としており、形式上は自治政府内務省の傘下にあるが、内務省自体にKDPの影響力が極めて強いこと、構成員の多くが元ペシュメルガ兵士であること、対「イスラーム国」戦の前線ではペシュメルガと同等に展開していることから、広義では(KDPの)ペシュメルガの一部と見なし得る [Chapmann 2011 : 119 ; Knights 2015 : 27-28]。

PUKについては、通称、第70ユニットのもとにやはり約2.5万人が存在する。15の地域旅団に2万人が属しており、その他に、コスラト・ラスール (kosret rresouł) 自治政府副大統領を警護するコスラト部隊がある。さらに、これに加えて、名目上はイラク国防省の指揮下にあるイラク大統領警護旅団が2つある<sup>(11)</sup>。さらに、対テロ特殊部隊 (dijhe tíror) が存在し、これは2012年から自治政府大統領府のもとに設立されたクルディスタン地域安

(9) 大統領職については、KDP党首のマスウード・バルザーニ (mes'oud barzaní) が自治区の大統領に、PUKのジャラル・タラバーニがイラク国家の大統領に就くことで、両者の棲み分けが図られた。

(10) 内訳は歩兵旅団が11、機甲旅団が2、砲兵旅団が2。

(11) PUKのペシュメルガがイラク大統領警護旅団を形成しているのは、イラク戦争以降現在まで継続して、PUK幹部がイラク政府大統領に就いているためである。PUK以外から大統領が就任すれば、その警護旅団の構成も変わると考えられる。

全保障評議会 (enjumení asayishí herémí kurdistan) の傘下に位置しているが、上記2つはいずれも実質的には PUK の指揮下にあると言ってよい<sup>(12)</sup>。

このように、ゼラバニや対テロ部隊なども含めた広義のペシュメルガの総数は13.2万人となり<sup>(13)</sup>、このうち地域防衛隊に所属する5.1万人を除くと、依然としておよそ8万の兵力が、二政党の直接的な指揮下にあることになる [Knights 2015:27-29; Chapman 2011: 119-121]。

さらに大きな問題は、統合部隊であるはずの地域防衛軍についても、内実は統合されているとは言いがたい点である。形式上はペシュメルガ省のもとにあっても、部隊の指揮官は党の指導者から命令を受けており、党間での諜報共有も限られている。ペシュメルガ兵士の募集、任用、昇進、配置などに関する意思決定を取り仕切っているのは自治政府ではなく依然として党である。ドホーク県の軍事アカデミーでは KDP の兵士が、スレイマニヤ県のそれでは PUK の兵士が訓練を受けるといった分裂の構図も、2009年のペシュメルガ省統一後も変化していない [International Crisis Group 2015: 9]。すなわち、統合に向けたステップがとられているはずの現在でも、ペシュメルガに対する省の役割は限定的で、イラク政府との窓口としての機能を中心とした政治的な機能しかもっておらず、軍を指揮する機能は持っていないのが実情である [Chapman, 2011: 111-115]。

#### 4. 統合という残された課題

ペシュメルガが統合部隊になっていないという事実は、イラク戦争後、それほど大きな問題にはなっていない。その理由の一つは、クルド勢力が、2003年以降のイラクにおいて自治区の地位を確固たるものにするために、1990年代の内戦の失敗を繰り返さぬよう、党派対立を極力封印して、政治的に足並みを揃えて対処してきたためである。その結果、両党のペシュメルガ同士の間で深刻な問題が発生することはなかった。2点目は、2003年から2014年の間は、領土問題や石油問題を巡って散発的に、自治区の南側の境界付近でイラク軍とペシュメルガとの間で緊張が高まり、一触即発の事態に陥ることはあっても、本格的な戦闘に至ることはなかったためである。

ペシュメルガの分裂が危機的な形で表面化したきっかけは、2014年夏に始まったジハード主義過激組織「イスラーム国」との戦闘であった。2014年6月にモスルを陥落させた

---

(12) なお、諜報機関である KDP のパラストイン (ajhensí parastíní asayishí herémí kurdistan) と PUK のザンヤリ (dezgay zanyarí)、対テロ対策や国家安全保障にかかわる両党の治安警察であるアサイシュ (asayishí partí, asayishí yekétí) も、クルディスタン地域安全保障評議会の傘下に位置している。しかし、現実にはいずれも依然としてそれぞれの党の直接の支配下にある [Wilgenburg and Fumerton 2015; International Crisis Group 2011: 14]。

(13) このうち平時に動員されるのは8万人規模で、対「イスラーム国」戦の最中にある2015年時点では、10~12万人が動員されているという [Knights 2015: 29]。



「イスラーム国」は当初、バグダードを目指して南下していたが、8月にはクルディスタン地域の方向へ北進してきた。不意を突かれたペシュメルガは次々に退却し、少数派ヤズィーディ教徒の惨殺を招く結果となった。その後は米軍を中心とする連合軍の空爆支援を得て数ヵ月間で領土を概ね奪還したものの、この敗退の責任を問う形で両党の間で非難合戦が繰り広げられることになった。

その後、約1,000kmに及ぶ「イスラーム国」との前線は、8つのセクションに分割され、従来からの勢力範囲に則って北西部をKDPのペシュメルガが、南東部をPUKのペシュメルガが支配している。ところが、これが油田地帯のキルクーク (kerkouk) や、ヤズィーディ教徒の多いシンジャール (shengal) など、双方ともに影響力を保持したい場所では、スムーズな協力体制がとれないという事態を招いている [International Crisis Group 2015: 10; Wilgenburg and Fumerton 2015: 3]<sup>(14)</sup>。

このように、KDPとPUKのペシュメルガは、自治区においては事実上の国軍としての役割を果たしているとはいえ、統合の試みが始まってから20年以上が経つにもかかわらず、依然として統一された指揮系統を持つ軍隊とは言いがたいのが実情である。

その背景には、クルディスタンの部族主義的な文化・社会背景が指摘できる。反政府武装闘争を組織するにあたって、知識層にクルド・ナショナリズムが広がる一方で、闘争に必要な戦闘員を動員できたのは部族長であり、彼らの間ではあくまで自分たちの部族に恩恵が得られる限りにおいてナショナリズムを支持するという、部族ナショナリズムが根強く存在していた [Tahiri 2007: 107]。時代とともにそうした部族主義は下火になっていったが、1990年代の自治区形成後は、党に対する忠誠心と引き替えに、党から雇用機会や安全などを得るといふ、党を単位としたネオ部族主義が広がった。クルド社会を凝集していた部族という要素が党に取って代わったと言える [McDowall 1996: 33; Tahiri 2007: 264-265, 289-290]。党のリーダーは、自分の党やその支配地域に対してもつ絶対的な権限を、自治政府という新たな仕組みに移譲することを拒み、これがペシュメルガの統合を妨げる要因となった。

なお、KDPの部族的な性格を嫌って結党されたPUKも、過去40年の間に、極めてKDPと似た組織構造を持つようになっていく。党首のジャラル・タラバーニが2012年末に脳梗塞に倒れて指導者としての役割を果たせなくなった後も、いわば部族長のように、党員の忠誠を集め続けており、党首の正式な交代は話題になっていない。そして、タラバーニの妻や息子、親戚が、PUKのペシュメルガや党財政に強い影響力を持って一族で権力を掌握しているという批判も増えている。党を単位としたネオ部族主義は、今ではKDPもPUK

---

(14) その他、例えばPUKのペシュメルガは欧米諸国からのボランティア兵士を一部受け入れているが、KDPはイラン・クルド以外のボランティア兵士は受け入れていないなど、部隊の運用にも統一された方針がとられていない [Wilgenburg and Fumerton 2015: 3]。

もほとんど変わるところはない<sup>(15)</sup>。

クルディスタンでは1990年代以降、国旗や国歌の制定、クルド語による教育システムの構築など、自治区を事実上の国家と見なして、様々な面で国家形成が進んだ。しかし、上述したネオ部族主義は、権力の交代を前提とした民主主義とは相容れず、選挙結果に基づいた連立政府の形成や、大統領任期の制限などにおいて、統治システムに多くの問題を来している [Yoshioka 2015: 30-33]。自治区であるクルディスタンが将来、独立した国家となり得るかという問題を考える時、国際社会や周辺国から国家承認が得られるかどうかという点がまず指摘できる。だが同時に、ネオ部族主義を脱却して、ペシュメルガを統合し、それを自治政府の下で統治できるかどうかという、内政問題も大きな課題として残っているのである。

## 引用文献

Bengio, Ofra (2012), *The Kurds of Iraq: Building State within a State*, Lynne Rienner.

Bruinessen, Martin van (1992), *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan*, Zed Books Ltd.

Chapman, Dennis P. (2011), *Security Forces of the Kurdistan Regional Government*, Mazda Publishers.

International Crisis Group (2011), "Iraq and the Kurds: Confronting Withdrawal Fears," *Middle East Report*, No.103, May 28.

(<https://d2071andvip0wj.cloudfront.net/103-iraq-and-the-kurds-confronting-withdrawal-fears.pdf>) (2016年9月20日アクセス)

International Crisis Group (2015), "Arming Iraq's Kurds: Fighting IS, Inviting Conflict," *Middle East Report*, No.158, May 12.

(<https://d2071andvip0wj.cloudfront.net/158-arming-iraq-s-kurds-fighting-is-inviting-conflict.pdf>) (2016年9月20日アクセス)

Knights, Michael (2015), "The Long Haul: Rebooting U.S. Security Cooperation in Iraq," *Policy Focus*, No.137.

([http://www.washingtoninstitute.org/uploads/Documents/pubs/PolicyFocus137\\_Knightss4.pdf](http://www.washingtoninstitute.org/uploads/Documents/pubs/PolicyFocus137_Knightss4.pdf)) (2016年9月20日アクセス)

Lawrence, Quil (2008), *Invisible Nation: Ho the Kurds' Quest for Statehood in*

---

(15) ただし、KDP との違いは、PUK 内部には常にそうした一族支配を批判し改革を求める勢力が存在していることである。皮肉にもそれゆえに、党内がまとまらず弱体化傾向にある。

- Shaping Iraq and the Middle East*, Walker & Company.
- McDowall, David (1996), “The Kurds,” *Minority Rights Group International Report*.  
(<http://minorityrights.org/wp-content/uploads/old-site-downloads/download-865-Download-full-report.pdf>) (2016年9月20日アクセス)
- McDowall, David (2007), *A Modern History of the Kurds*, I.B.Tauris.
- Tahiri, Hussein (2007), *The Structure of Kurdish Society and the Struggle for a Kurdish State*, Mazda Publishers.
- Wilgenburg, Wladimir van and Mario Fumerton (2015), “Kurdistan’s Political Armies: The Challenge of Unifying the Peshmerga Forces,” *Civil-Military Relations in Arab States*, December 16.  
([http://carnegieendowment.org/files/ACMR\\_WilgenburgFumerton\\_Kurdistan\\_English\\_final.pdf](http://carnegieendowment.org/files/ACMR_WilgenburgFumerton_Kurdistan_English_final.pdf)) (2016年9月20日アクセス)
- Yoshioka, Akiko (2015), “The Shifting Balance of Power in Iraqi Kurdistan: The Struggle for Democracy with Uninstitutionalized Governance,” *International Journal of Contemporary Iraqi Studies*, 9: 1, pp.21-35.
- 勝又 郁子 (2001) 『クルド・国なき民族のいま』 新評論。